

日本語のかな文字とローマ字表記法の変遷

—明治中期から昭和初期にかけて—

The changes of Japanese Kana notation and Romaji notation —From the mid Meiji-era to the Early Showa-era—

福元美和子 小嶋栄子

FUKUMOTO Miwako KOJIMA Eiko

提要 本論文は福元・小嶋（2020）順應着時代の变迁，将明治中期至昭和初期的罗马字和假名文字表記法以年序列表的形式做了总结。目的是以此作为今后的研究基础。分类研究是至今的主流，本論文，把两个历史年代放在一起同时研究。在今后的各个研究，以及国字问题的研究上将成为重要的参考材料之一。

キーワード：ローマ字 かな文字 日本語学説史 国字問題 表記法

目次

1. はじめに
2. かな文字とローマ字表記法の変遷
- 2-1. 年表
3. おわりに

1. はじめに

本稿は、小嶋（2001）「日本におけるローマ字の歴史」を基礎としながら、より時代範囲を絞り、またあらたに「かな文字の歴史」についての事柄を加えて、年代順に並べなおす作業を行い、今後の研究の資料とすることを目的としている。第一期として、福元・小嶋（2020）では、江戸末期から明治中期を扱った。本稿はそれ以降から昭和初期を扱うこととする。

本稿で取り上げる時代は、小嶋（2001）にもあるように「日本人が日本語を書き表す」ことについて深く考え、教育や社会の場でどのように書き表すかを決定していく時代だといえる。同時に、「言文一致」についての議論も盛んになる。こうした国内の動

きに加え、世界との動きの中で、いくつかの戦争も経験することとなる。

以上、この時期をあらためて時系列的にみることは、日本語学説史研究を進めていく上で一つの資料となると考えられる。

2. かな文字とローマ字表記法の変遷

わが国におけるかな文字とローマ字表記の歴史の概略は、福元・小嶋（2020）にまとめられている。本論において、筆者があらためてかな文字とローマ字表記の歴史について発見したという事実はない。けれども、さまざまな文献からかな文字とローマ字表記の歴史を同時に体系的に概観できる資料はこれまでに見られなかった。こうした作業を試験的に実施することで基礎資料となり、それらをこの分野の今後の研究資料として提供することを目的としている。

以下、年表形式でわが国のローマ字の歴史を記述していくことにする。西暦の直前に、わが国のローマ字の歴史に関して直接的関連事項とされるものには◎を、わが国のかな文字の歴史に関して直接的関連事項とされるものには●を、間接的関連事項とされるものには※印を附した。それぞれの歴史的事項の最後に出典を明記した。

また、年表の書き方については、福元・小嶋（2020）と同様に小嶋（2001）を継承する。

2-1. 年表

- | | |
|--------------|---|
| ● 1898 (M31) | ・ 国字改良会設立（日本語学会編 2018）。 |
| ● 1899 (M32) | ・ 帝国教育会内に国字改良部を設ける（日本語学会編 2018）。 |
| ※ 1899 (M32) | ・ 帝国教育会内に言文一致会を設ける（日本語学会編 2018）。 |
| ● 1900 (M33) | ・ 自治館、『国語改良異見』を刊行（日本語学会編 2018）。 |
| ◎ 1900 (M33) | ・ 文部省、改正第3次小学校令に対応し、ローマ字の書き方取調委員の調査報告を発表。（日本語学会編 2018）。 |
| ● 1900 (M33) | ・ 文部省、小学校令施行規則制定。仮名字体を平仮名・片仮名各1種（現行の字体に決定（日本語学会編）。 |
| ※ 1901 (M33) | ・ 言文一致会から国語調査会を設ける請願書を両院に提出（日本語学会編 2018） |
| ● 1901 (M34) | ・ 山田美沙、『言文一致文例』刊行（日本語学会編 2018）。
・ 堀江秀雄、『国字改良論纂』刊行（日本語学会編 2018）。 |
| ※ 1904 (M34) | ・ 2月：日露戦争始まる（児玉 1997）。
・ 国語調査委員会、「国語国字改良論説年表」「片仮名・平仮名読み書きノ難易ニ関スル実験報告」を刊行（日本語学会編 2018）。 |
| ※ 1904 (M37) | ・ 4月：日清戦争終わる（児玉 1997）。 |

- 1904 (M37) ・「国語国字改良論説年表」、「片仮名読ミ書キノ難易ニ関スル実験報告」(国語調査委員会)刊(日本語学会編2018)
- ◎ 1905 (M38) ・「ローマ字ひろめ会」成立(岡倉1946、たかはし1998)。
・この会は「日本語をローマ字で書くことを広める」ことを目的とし、機関紙Romajiを発刊(岡倉1946、たかはし1998)
・「書方には拘泥しないで、綴り方は、全く自由で南部、大倉、丸山等の色々なる書方がありまして標準式杯と云う様な名は全く無かったのであります。」(田中館1935)
・田丸卓郎、「日本式ローマ字」の名を用いる(日本語学会編2018)。
- 1905 (M38)
- ◎ 1906 (M39) ・国語調査委員会、「仮名遣諮問ニ対スル答申」提出。
・『明星』誌上にローマ字の詩歌あらわれる(北原白秋、与謝野寛等)(近藤1997)
・田丸卓郎、『東洋学芸雑誌』に「日本式羅馬字」を発表(日本語学会編2018)
・田丸卓郎『羅馬字文の書き方』を刊行(日本語学会編2018)。
・高等教育会議、文部大臣からの諮問「仮名遣諮問ニ対スル答申」提出(日本語学会編2018)。
- 1906 (M39)
- ◎ 1907 (M40) ・文部省「新旧仮名遣対照語彙」発表(日本語学会編2018)。
・ローマ字ひろめ会会頭に西園寺公望を推す(日本語学会編2018)。
- ◎ 1906~7 (M39~40) ・衆院本会議、ローマ字を日本に於ける一般小学校生徒に課する件(根本正・松本君平提出建議案)(日本語学会編2018)。
- 1907 (M40) ・田中館愛橘、田丸拓郎等日本式ローマ字運動盛り上がる。金田一京介も(近藤1997)
・貴族院、仮名遣いを発音式から歴史的に改正すべき建議案を文部大臣に提出(日本語学会2018)。
- ◎ 1908 (M41) ・文部大臣国語仮名遣改定案の実施を1ヵ年延期と決定(日本語学会2018)。
・ヘボン式ローマ字改正される→「標準式」または「改正ヘボン式」となる(kwa gwa ye woなどを削除)(たなか1995)。
・「ローマ字ひろめ会」がつづり方をヘボン式に準じた「壙め會式」に統一することになった(田中館1935)。

- 1908 (M41)
 - ・「ローマ字ひろめ会」評議員会がつづり方を「ヘボン式ローマ字」に統一することを決定（小泉 1978）。
 - ・文部省に臨時仮名遣調査委員会設置。5回の会合を開く（日本語学会編 2018）。
- ◎ 1909 (M42)
 - ・文部省令で、「小学校令施行規則」のうち、仮名字体・字音仮名遣・漢字制限に関する規定を削除（日本語学会編 2018）。
 - ・石川啄木『ローマ字日記』を著す（4月3日～6月16日）。啄木の用いたつづり方は、<ji ji tu>というように、ヘボン式を交えた日本式主体の書き方で彼特有のもの（詳しくは小泉 1978、太田 1995、近藤 1997 など参照のこと）。
- ※ 1909 (M42)
 - ・相談役が田中館・芳賀、事務指図役が田丸で「日本のローマ字社」創立（田丸 1992、日本語学会編 2018。田中館 1935 では M45 となっている）。
- 1909 (M42)
 - ・文部省、「臨時仮名遣調査委員会議事録速記録」発表（日本語学会 2018）。
- ◎ 1910 (M43)
 - ・大矢透『仮名遣及仮名字体沿革資料』刊行（日本語学会編 2018）。
- ※ 1910 (M43)
 - ・田丸睦郎（卓郎の弟）、9月に小石川区明化小学校の5年生に、11月に東京女子高等師範学校附属小学校二部三部の5年生にローマ字を教える（田丸 1922）。
- ◎ 1911 (M44)
 - ・「ローマ字新聞」（翌年「ローマ字世界」と改称）創刊（日本語学会 2018）。
 - ・「日本言葉の会」起る。帝国教育会内言文一致会解散。
 - ・田丸睦郎、5月に京橋区泰明小学校の5・6年生に、10月に同区京橋小学校の5・6年生にローマ字を教える（田丸 1922 によれば、その後も合計 1000 人の小学校生徒にローマ字を教えている）。
- 1911 (M44)
 - ・ヘボン、アメリカで死去、96 歳（岡倉 1946）。
- ※ 1912
 - ・「日本のローマ字社」が「ローマ字ひろめ会」経営の「ローマ字新聞」の編集・発行を前年に引き受け、この年からそれを月刊「ローマ字世界」と改める（田丸 1922。田中館 1935 では経営全部を引き受けた M45 とされている）。
- ◎ 1912 (M45)
- ◎ 1912 (T1)
- 1912 (T1)
 - ・大矢透、『仮名源流考』刊行（日本語学会編 2018）。
- ◎ 1913 (T2)
 - ・7月30日：大正と改元（日本語学会編 2018）。

● 1912~1915

(M45~T4)

※ 1913(T2)

◎ 1913(T2)

● 1913(T2)

◎ 1914(T4)

◎ 1915(T4)

◎ 1917(T6)

● 1917(T6)

◎ 1919(T8)

◎ 1920(T9)

- ・ 田中館愛橘ら日本式賛成論者が「壙め會」と分離して「日本のローマ字社」を設立、『ローマ字世界』を発刊（田中館 1935、日本語学会 2018）。
- ・ 田丸卓郎『sindo（振動）』（ローマ字による学術図書）発刊（小泉 1978）
- ・ 大矢透、『仮名の研究』刊行（日本語学会 2018）。
- ・ 寺田寅彦『Umi no Buturigaku（海の物理学）』（ローマ字による学術図書）発刊（小泉 1978）
- ・ 『疑問仮名遣 前・後』（国語調査委員会）刊行（日本語学会編 2018）。
- ・ 第一次世界大戦起きる（児玉 1997、日本語学会編 2018 には、1914 年と記載されている）。
- ・ 中央气象台、部内のローマ字つづり方を日本式に統一（日本語学会編 2018）。
- ・ 中村春二、『かながきのすすめ』刊行（日本語学会編 2018）。
- ・ 朝鮮総督府、普通学校における国語教授に発音式かなづかい採用（日本語学会編 2018）。
- ・ 田丸卓郎、『ローマ字国字論』刊行（日本語学会編 2018）。
- ・ 4 月 24 日『ローマ字引き国語辞典』（上田万年著、富山房）出版される。見出しは 31,847 語で改正へボン式を採用、ただし撥音は m を用いず n だけ。（堺田 1997）
- ・ 6 月 27 日『ローマ字索引国漢辞典』（近藤久吉・栄田猛猪合著、啓成社）出版される。見出しは 24,313 語で改正へボン式を採用、ただし上田と同様撥音は m を用いず n だけ。（境田 1997）
- ・ 6 月 1 日『ABC びき日本辞典』（井上哲次郎・服部字之吉・新渡戸稲造等共編、三省堂）出版される。見出しは 93,104 語で改正へボン式を採用、ただし撥音は n だけ（境田 1997）。
- ・ 9 月：陸軍省陸地測量部が地図の地名のローマ字つづりを日本式に改めた（このときすでに鉄道省は駅名を標準式にしていた）（小泉 1978、日本語学会編 2018）。
- ・ 左近義粥、『国字としてのローマ字』を刊行（日本語学会 2018）。

- 1920(T9)
 - ・ 橋本進吉、「国語仮名遣研究史上の一発見」（橋本進吉、「帝国大学」23-5）発表（日本語学会編 2018）。
 - ・ 11月29日『ローマ字引き実用国語辞典』（藤岡勝二著、三省堂）出版される。見出しは83, 555語で改正へボン式を採用、ただし撥音はnだけ（境田 1997）
- ※ 1920(T9)
- ◎ 1921(T10)
 - ・ ローマ字の国際性を認めたローマ字書きの選挙投票有効の大審院判決下る（たなか 1995）。
 - ・ 田丸卓郎『ローマ字文の研究』（日本のローマ字社）を出版（田丸 1920、日本語学会編 2018）。
 - ・ 仮名文字協会（カナモジノカイの前身）設立（日本語学会編 2018）。
 - ・ かながきひろめのかい機関紙「かなのめばえ」創刊（日本語学会編 2018）。
 - ・ 大審院、ローマ字投票の有効判決。
- ◎ 1922(T11)
 - ・ 「日本のローマ字社」は「コロナ」タイプライター社に自らが考案したローマ字日本語に適した配列を施したものを特別注文して、希望者に分けた（田丸 1922）。
 - ・ 大阪にへボン式ローマ字運動団体、帝国ローマ字クラブ設立（日本語学会編 2018）。
- 1922(T11)
 - ・ 2月「日本のローマ字社」の社友の仲間が、独立した自分の団体を作るという意味で、東京に「日本ローマ字会」設立される。（会長・田中館愛橘、副会長・田丸卓郎、会員約220人。目的は日本式綴り方でローマ字を国字にすること）（田丸 1922、日本語学会編 2018）。
- ※ 1923(T12)
- ◎ 1924(T13)
- 1924(T13)
 - ・ 8月：海軍水路部が海図のローマ字つづりを日本式にする（小泉 1978、日本語学会編 2018）。
 - ・ 10月：へボン式の代表者岡倉由三郎死去（岡倉 1946）。
- ◎ 1925(T14)
 - ・ 川副佳一郎『日本ローマ字史』刊行（日本語学会編 2018）。
 - ・ 仮名文字協会機関紙「カナノヒカリ」創刊（日本語学会 2018）。
- 1925(T14)
 - ・ 「つぼみ」（「かなのめばえ」から改題）創刊（日本語学会編 2018）。
 - ・ 9月1日：関東大震災。これにより同日から行われる予定であった東京・大阪有力14新聞社漢字制限実行の競争宣言は事実上中止と
- ※ 1925(T14)

- なる(日本語学会編 2018)。
- ・ 内務省、衆議院議員選挙にローマ字の有効を告示。
- ※1926
- ・ 仮名文字協会、カナモジカイと改称(日本語学会編 2018)。
 - ・ 12月：臨時国語調査会、「仮名遣改定案」を発表。翌1925年の前半にかけて議論が盛んになる。(日本語学会編 2018)。
- 1926(T15/S1)
- ・ 桑木巖翼『Seiy Kinsei Tetugakku-si (西洋近世哲学史)』(ローマ字による学術図書) 発刊(小泉 1978)
- ◎●1927 (S2)
- ・ 加茂正一、『国字問題十講』刊行(日本語学会編 2018)。
- ◎1927 (S2)
- ・ 臨時国語調査会「国語字音仮名遣改定案」を発表(日本語学会編 2018)。
- ◎1928 (S3)
- ・ 臨時国語調査会「字体整理案」を発表(日本語学会編 2018)。
 - ・ 東京有力10大新聞社、「漢字制限に関する宣言」を発表(日本語学会編 2018)。
 - ・ 12月25日昭和と改元(日本語学会編 2018)。
- ◎1929(S4)
- ・ 臨時国語調査会「字体整理案」「漢語整理案ソノー」を発表(日本語学会編 2018)
- 1929(S4)
- ・ 臨時国語調査会、「仮名遣改定案補足」(当字廃棄ト外国語ノ写シ方)を発表(日本語学会 2018)。
- ◎1930 (S5)
- ・ 鉄道省、鉄道掲示例規で、ローマ字はヘボン式、発音式仮名遣い、左横書きの採用を通達。(日本語学会編 2018)。
 - ・ 相尾調教『Su gaku no Dodai(数学の土台)』(ローマ字による学術図書) 発刊(小泉 1978)。
 - ・ 海軍省、部内のローマ字つづり方を日本式に統一(日本語学会編 2018)。
 - ・ 7月：国際地理会議(於ロンドン)が日本政府に対し「日本地名のローマ字書きに一つの公式のものを定められたい。」と決議する(小泉 1978)。
 - ・ 陸軍省、部内一般を日本式ローマ字つづり方に統一(日本語学会編 2018)。
- ◎1931 (S6)
- ・ 山田義雄『仮名遣の歴史』刊行(日本語学会編 2018)。
 - ・ 国際連盟知的協力委員会がローマ字使用勧告の動機を採択し、「ローマ字つづり方の一定していない国ではなるべく速やかにそれぞれの国語の性質に適切なつづり方に統一すべきこと」という項目を定

- め、委員本会議で可決された（小泉 1978）。
- ・ 文部省が国際連盟からのローマ字 n つづり統一の要求にこたえるため「臨時ローマ字調査会」を設置する（小泉 1978）。
 - ・ 12月15日：「臨時ローマ字調査会」第1回総会開かれる。代表専門委員は以下の通り。
 - 日本式 福永恭助、佐伯功介、菊沢季生
 - 標準式 神保格、岡倉由三郎、宮崎静二
 （臨時ローマ字調査會 1936）
 - ・ 1月13日：「臨時ローマ字調査会」第2回総会開かれる。田中館が「ローマ字では、各國の音を、其國の國語音の音價に従ってそれを寫すと云うことが、自然の結果であります。」と述べる音韻論の立場を主張する（田中館 1935、臨時ローマ字調査會 1936）
- 1931(S6)
- ・ 4月：「ローマ字調査会」は専門的調査のため、臨時委員として二荒芳徳、神保格、末広徹太郎、桜根孝之進、宮崎静二、菊沢季生の6名を任命（臨時ローマ字調査會 1936）。
- ※ 1931(S6)
- ◎ 1932(S7)
- ・ 5月15日：「臨時ローマ字調査会」第4回総会開かれる（臨時ローマ字調査會 1936）。
- ※ 1932(S7)
- ◎ 1932(S7)
- ・ 6月30日：「臨時ローマ字調査会」第4回総会開かれる（臨時ローマ字調査會 1936）。
 - ・ 国際言語学会（於ジュネーブ）において、各国正書法の原則として音素主義をとるべきことが承認される。そして、トルベツコイが日本の日本式つづり方を模範的事例としてあげる（小泉 1978）。
- ◎ 1933(S8)
- ・ 11月9日：「臨時ローマ字調査会」第5回総会開かれる（臨時ローマ字調査會 1936）。
 - ・ 臨時国語調査会、「常用漢字表」および「仮名遣改定案」の修正を発表（前者は1856字に、後者はジヂズツの区別を部分的に採用）
- 1933(S8)
- （日本語学会編 2018）。
- ・ 満州事変勃発。日中十五年戦争に突入（日本語学会編 2018）。
- ※ 1933(S8)
- ・ 4月25日：「臨時ローマ字調査会」第6回総会開かれる。（臨時ローマ字調査會 1936）。
- ◎ 1934(S9)
- ・ 5月：五・一五事件（児玉編 1997）。
 - ・ 11月28日：「臨時ローマ字調査会」第7回総会開かれる（臨時ローマ字調査會 1936）。
- ◎ 1935(S10)

- ・ 5月16日：「臨時ローマ字調査会」第8回総会開かれる。神保格が「一字一音主義」の標準式を支持する演説を行い、佐伯功介「一字一音主義」の日本式を支持する演説を行った（佐伯1935、臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 11月7日：「臨時ローマ字調査会」第10回総会開かれる（臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 春日政治、『仮名發達史序説』を刊行（日本語学会編2018）。
 - ・ 木枝増一『仮名遣研究史』を刊行（日本語学会編2018）。
 - ・ 『小学国語読本（サクラ読本）使用開始（日本語学会編2018）。
 - ・ 3月：第1回主査委員会（柴田徹心、佐伯功介、神保格、宮崎静二、菊沢李生、新村出、柴田文部次官）開かれる。以後、「臨時ローマ字調査会」第11回総会までに12回開かれる（臨時ローマ字調査會1936）。
- ※1936(S11)
◎1936(S11)
- ・ 1月15日：「臨時ローマ字調査会」第11回総会開かれる。第1次主査委員会の次のように「日本式ローマ字つづり」を支持する結論が報告される。
 1. ハ行の「フ」はhuとすること。
 2. 拗音は子音+y+母音の連結である。
 3. サ行・ナ行・タ行について、日本式の表し方が理論的にいけないと言うことはできず、標準式の表し方は態度が一貫していない。
 4. 撥ねる音はすべてnを以て表す。
 （臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 11月21日：「臨時ローマ字調査会」第12回総会開かれる（臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 2月：二・二六事件（児玉編1997）
 - ・ 6月13日：「臨時ローマ字調査会」第14回総会開かれる。ここにおいて、第3次主査委員会作成の原案を承認した。おおよそ日本式ローマ字つづりを認めたが、「ジヂ」「ズヅ」の区別を認めない点のみ、ヘボン式の方針に従った（臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 6月30日：「臨時ローマ字調査会」官制廃止。（臨時ローマ字調査會1936）。
 - ・ 7月：日中戦争起こる（児玉編1937）。
- ※1937(S12)
◎1937(S12)
- ※1939(S14)
◎1939(S14)
- ・ 9月：臨時ローマ字調査会により、内閣訓令「国語ローマ字綴り
- ※1941(S16)

※1945(S20)

方二関スル件」として統一されたローマ字つづり方、いわゆる訓令式ローマ字公布される。この訓令式は「日本式」を基にしたものであるが、ザ行、とダ行のむだが省かれ、ワ行もwa以外はiueoと、より現実音に忠実である。(小泉1978に訓令式ローマ字の一覧がある、日本語学会編2018)。

- ・しかし、「日本式」を基にしたため、「ヘボン式」の支持者から反発され、統一には至らなかった(沖森編1997)
- ・第2次世界大戦始まる(児玉編1997、日本語学会編2018)。
- ・『口語辞典 Hanasikotoba o hiku Zibiki』(福永恭助・岩倉知実共著、日本のローマ字社)発行される。文語から口語を引くもので、用例のみで解釈はない(境田1997)。
- ・特別高等警察によりローマ字運動家が大量に検挙される「左翼ローマ字運動事件起こる」
- ・国民学校令公布(小学校を国民学校と改称)(児玉編1997、日本語学会編2018)
- ・12月:日本軍、真珠湾攻撃。太平洋戦争始まる(児玉編1997、日本語学会編2018)。
- ・終戦。連合軍最高司令部マッカーサー来日(児玉編1997)。
- ・訓令式ローマ字の使用を禁止じる。駅や主な道路の名前を英語で掲示することとし、ローマ字は修正ヘボン式のつづりを採用することを指令した。これによって、明治のはじめから多くの有識者によって続けられてきた、日本人によって、日本語にふさわしいローマ字を作り出そうという運動は潰されてしまった(小泉1978、たなか1995)。
- ・R.Aミラー『アメリカ進駐軍の役人たちは、概してこのローマ字には国家主義的、いや、さらには軍国主義的な含みがあるので、是非とも抑圧するべきであると考えていたようである。彼らは「民主主義的な日本」を建設するために、それよりも古いヘボン式ローマ字を用いるように勧めたのである。こういうばかげた態度に到達するに至った不思議な理論は、今日再構成できそうもないが、当時は占領軍の「教育情宣」政策の一環を成す重要なものであった』(たなか1995)。
- ・9月:戦時教育令廃止(児玉編1997)。

3. おわりに

本稿では、明治中期から昭和初期のかな文字とローマ字の歴史についてみてきた。

明治中期は、言文一致と国字問題を同時に推し進められたことがわかった。また、ローマ字は明治から盛んに識者らの会が結成され独自にさまざまな試みがなされているが、かな文字は国が検討を進めていることがわかる。大正に入ると、ローマ字は、中央气象台や陸軍省といった公的な場での綴り方が統一、国会選挙でもローマ字記入が認められるなど、どんどん日本社会に浸透していく。一方のかな文字は、識者らによって仮名文字協会に代表される会が結成される。昭和は今後もまとめていくことで変化がわかるかと思う。

以上、本稿でまとめられたことは、十分とは言えないかと思うが、日本のローマ字とかな文字の大きな流れを同時にみる試みによって、国字問題を研究する上でおおまかな動きがわかり、今後の研究の基礎となると考える。

参考文献

イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想』 岩波書店

岡倉由三郎 (福原麟太郎編) (1946) 『ローマ字の話』 研究社

沖森卓也 (1978) 『日本語学史』 おうふう

橋田広国 (1992) 『日本のローマ字運動』 日本ローマ字研究会

小泉保 (1978) 『日本語の正書法』 大修館

小嶋栄子(2001) 「日本におけるローマ字の歴史」『研究会報告』第22号、日本語文法研究会：19-40

児玉幸多編(1997) 『日本史年表』 吉川弘文館

近藤典彦(1997) 「近代文学とローマ字 啄木ローマ字日記から」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 1997.1

酒井直樹(1996) 『死産される日本語・日本人「日本」の歴史—治世的配置』 新曜社

堺田捨信(1997) 「ローマ字引き国語辞典」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 1997.1

鈴木康之(1977) 『国語国字問題の理論』 むぎ書房

たかはし たろう(1998) 「ローマ字の長音表記について」『Rmazi Sekai』1998-5,の。 661, Nippon Romazi Sekai

たなかみのる(1995) 「ひらがなとローマ字」『Rmazi Sekai』1995-5 No.625 Razikai

田中館愛橘 1935 「日本式ローマ字の要旨—文部省ローマ字調査會第二回総会に於ける所論—」『音聲學とローマ字問題』 鬼頭禮蔵編、日本のローマ字社

土岐善麿(1997) 「日本語の表記法とローマ字における外来語・外国語の表記」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 1997.1

日本語学会編(2018) 『日本語学大辞典』 東京堂出版

福元美和子・小嶋栄子 (2020印刷中) 「日本語のかな文字とローマ字の歴史—江戸末期から明治中期にかけて—」『長崎短期大学紀要 第32号』